

*自然神学の社会科学への拡張

後期オリエンテーション

1. 自然神学とその歴史的展開

1-1: 自然神学とは何か 1-2: 自然神学とキリスト教思想（弁証と論争）の形成

1-3: 自然神学と自然学・自然科学 1-4: 自然神学の古典的な諸問題

1-5: 自然神学の拡張と聖書

2. 自然神学の拡張と科学論

2-1: 聖書の社会教説

2-2: 聖書の経済・環境思想 12/1

2-3: 聖書の政治思想 12/8

2-4: 自然神学から社会科学へ 12/22

2-5: キリスト教思想と科学技術 1/5

2-6: キリスト教思想と生命 1/12

2-7: キリスト教思想と脳科学 1/19

フィードバック

<前回>自然神学の拡張と聖書

(1) コミュニケーション合理性の問いとしての自然神学

1. これまでの議論のまとめ：自然神学の可能性を論じる際のポイント

①自然神学、とくに神の存在論証は信仰を前提とした思想的営みであり、啓示神学と諸科学との媒介を意図している。

②自然神学あるいは神の存在論証は信仰内容をめぐるコミュニケーションにおける合理性の確保の問題と解することができる。いずれにせよ、現代に思想状況において自然神学の可能性を考えるときの第一のポイントは自然神学を宗教におけるコミュニケーション合理性の問題と考えるという点であろう。

③しかし、繰り返すように自然神学による論証は無神論者の回心に関しては無力である。その場合、それは論証というよりも、説明ないしは告白にとどまる。

(2) コミュニケーション合理性と宗教間対話

2. コミュニケーションは、意味と理解を前提にする。

歴史の非完結性、首尾一貫した連関を破る様々な断絶・溝の存在、複数性・断片性

↓

意味と理解の成立には、諸伝統の相互関係・対話の成立の場が必要。

3. 人間存在自体から。人間の生物学的条件から？

↓

形式性における普遍的前提としての言語

言語・意味は、存在論的概念である。

討論・対話の形式的条件としての語用論

ハーバーマスの普遍的語用論（Universalpragmatik）

4. 理想的発話状況（die ideale Sprechsituation、歪み無きコミュニケーション状況）の先

取り＝終末論

コミュニケーション的言語使用の四つの妥当性要求＝言語論

相互の理解、認識の共有、相互の信頼、相互の調和という相互主観的關係
理解可能性(Verständlichkeit)、真理性(Wahrheit)、正当性(Richtigkeit)
誠実性(Wahrhaftigkeit)

↓

現実のコミュニケーションの成立の場：

「相互に妥当請求を承認していることを相互に理解していること……」
つまり、無限遡及のパラドクスを内包した言語論的構造。

↓

真理とは何か：真理の合意説

(3) ティリッヒの「宗教の神学」

(芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994年。)

2. 対話をめぐる諸問題

・対話の条件：*Christianity and the Encounter of the World Religions*, 1963.

(Paul Tillich. *Main Works*, 5), p.313

- (1) 相互に相手の宗教の価値を承認し合うこと。固有の真理性をもつ相手。
- (2) 対話の当事者がそれぞれの宗教を代表していること。自らの宗教に対する確信と説明能力。
- (3) 共通基盤(common ground)の存在。 cf. common basis
- (4) 相手の批判に開かれていること。

3. 対話の意義あるいは動態

対話を媒介とした自己理解の深化

cf. 内省による自己理解、現象学と解釈学

自己と他者の動的連関

理解と批判の媒介

他者と批判を経由する自己理解

4. 対話の主体

個人／共同体／思想

公式の教会組織との関わりを持ちつつ、その周辺で
解放の神学、あるいはキリシタン：基礎的共同体、組、講

↓

個人と共同体との関係性についての理論構築が必要。

人格と共同性

(4) 自然神学の拡張と聖書

1. 自然学全般のモデルとしての狭義の自然神学

聖書の創造論と自然学（形而上学）との共通の場としての「宇宙」
宇宙の秩序と人間の位置、そして悪

↓

自然神学と聖書

宇宙論的な諸宗教における共通の地平、それに基づくコミュニケーション

2. 自然神学の社会科学の問題領域への拡張

別の意味の地平へ移行する。

社会的場において。家族から国家へ。

3. キリスト教思想(神学) — 聖書・聖書解釈 — 社会科学: 社会、政治、経済

- ・自然神学としての基盤・規範としての聖書学:

神学と諸科学との接点・コミュニケーション可能性。

神学と社会科学→人間学(人文学)、理念/現実

- ・人格的社会的連関: 親密圏から公共圏

市民社会、国家・民族、国際・帝国

性、家族

2. 自然神学の拡張と科学論

2-1: 聖書の社会教説

(1) 自然神学の拡張と聖書

1. 自然人学全般のモデルとしての狭義の自然神学

聖書の創造論と自然学(形而上学)との共通の場としての「宇宙」(自然/歴史)

学の基礎としての自然学、自然本性の位置。

宇宙の秩序と人間の位置、そして悪(古代末期の問い)

↓

狭義の自然神学: キリスト教と古代地中海世界の知的環境との接点を構成する。

宇宙論的な諸宗教における共通の地平、それに基づくコミュニケーション

自然学的な観点から見た聖書の創造物語の意義(近代以降の科学との対立の要因ともなる)。

2. しかし、現代(知の多元性)においては、自然神学の社会科学の問題領域への拡張、つまり、別の意味の地平への移行が必要である。古代地中海世界の知的世界の相対化。

↓

社会教説という問題設定。

古典的研究としてのトレルチ。

3. トレルチ『社会教説』

社会教説とは。教会、分派、神秘主義の三類型。自然法。経済、政治、家族。

Ernst Troeltsch, *Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen*, 1912 (*Gesammelte Schriften* 1. Scientia Verlag)

『古代キリスト教の社会教説』(高野晃兆・帆苅猛訳) 教文館。

4. 『古代キリスト教の社会教説』より

- ・社会的なもの、社会学的宗教的基本図式、基本理念

- ・イエスの説教→絶対的個人主義と絶対的普遍主義

- ・理念と社会形成

「かかる社会教説によって近代的な状況にとって何か有用なまた価値あるものになり遂げられるかどうかということだけが問題なのである」(17)

「歴史的な勢力としての教会並びにキリスト教はあらゆる点においてその過去によって、つまり聖書と共にたえず改めてその影響力を及ぼしてきた福音によって並びに社会生活及び文化全体に関係する教義によって、規定されるという基本的事実にぶつかる」(18)

「《社会的なもの》(das »Soziale«)とはそもそも何を意味するのか」(20)

「《社会的なもの》の概念はむしろ今日よく知られた意味において一般的な社会学的な諸現象の特定の狭く限界づけられた断面、即ち国家的な規制と政治的な関心から解放された

或いはかかるものからは二次的にのみ問題とされる社会学的関係を意味する。この社会学的諸関係は経済生活、住民間の緊張、分業、階級分化並びに直接政治的と関係づけられない他の二、三の関心から生じるが、「今日の状況によって特に強調されている《社会》Gesellschaft と《社会的》social という言葉のこの狭い意味にわれわれは留まらねばならない」(24)

「近代科学が《社会》Gesellschaft という言葉で先ず第一に経済現象から生じる生活連関を考えているのは正しいであろう」(26)

「個人と共同体 Gemeinschaft の関係のキリスト教的秩序のような非常に普遍的な理念から生ずる社会学的基本見解 (Grundanschauung) はあらゆる生の関係が何らかの方法で影響を及ぼすところの社会学的基本図式(ein soziologisches Grundschema)を意味するのは確かにもちろんのことである」(26)

「特に経済的一分業的《社会》Gesellschaft は宗教的理念から導かれる連帯 Gemeinschaftlichkeit とは異なった社会的基盤をもった独立した現象であり続ける」

「国家と社会 Gesellschaft とはわれわれの近代的な用語によってはじめて区別されうる。《社会》の特徴的なものは近代的な、形式的-法的国家概念との対立によってはじめて生ずるのである。この対立からはじめて社会という概念全体がその光と具体的な意味を持つのである」(27)

「はじめから、キリスト教のすべての社会教説は同時に国家と社会についての教説でもあった。その際にキリスト教の人格的なものから出発する思考形式にとって家族は同時に国家と社会の前提であり、それ故キリスト教の社会教説に属している。宗教的な共同体理論にとって家族、国家並びに経済社会は密接に結びつけられた社会学的形成物として現れることによって、今やけれども再び《社会的なもの》の概念が拡大されるのである」(28)

「いくつかの方針」「第一にキリスト教固有の社会学的理念とこの理念の構造及び組織について問わなければならないであろう」(31)、「第二には、この社会学的な形成物と社会的なるもの、即ち国家、経済的一分業的社会及び家族との関係について問わなければならないであろう」、「社会学的宗教的基本図式の他の生活環境への現実的な影響とはどのようなものであったか」(32)

5. 理念：福音(説教)・神の国 → 社会学的図式：絶対的な個人主義と普遍主義
→ <歴史的状況> 社会的なものの形成：家族、経済、国家
キリスト教の社会的三類型：教会、分派、神秘主義
愛の共産主義

(2) 家族

1. 家族と民族との同型性

家族的血縁関係として表象されたイスラエル共同体(古代イスラエル民族起源神話)

↓

cf. 契約との関係

家族としての教会

初期キリスト教における共同体原型としての「家の教会」の存在

2. エフェソ

「2:14 実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、15 規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平

S. Ashina

和を実現し、16 十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。17 キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。18 それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。19 従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、20 使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、21 キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。22 キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。」

3. 民族とは、血縁的つながりの延長上に自然に成立するものではなく、物語（民族起源神話）を介して、共同体的な構想力の作用に支えられてはじめて形成される。

4. 民族を構成する構想力の素材としての「家族」「家」

5. 「人間集団は時間が経過するについてその構成員が必然的に入れ替わる以上、構成員自体の同一性を語ることはできない。そこで出てくる発想の一つに、民族には超歴史的な本質が内在し、構成員とは別にあるいは独立に実在し続けるというものがある。」（小坂井、2002、30）

6. 家族のメタファー化。イエスの宗教運動の家族論。

家族論の歴史性：創世記の創造物語における家族の描写（創世記2. 24）と西欧近代の一夫一婦制の類比

「2:24 こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。」

→ 古代の地中海世界およびイスラエルの家族制度

家族関係における縦軸（世代）と横軸

7. ①「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。わたしは敵対させるために来たからである。人をその父に、娘を母に、嫁をしゅうとめに。こうして、自分の家族の者が敵となる。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにはふさわしくない。」（マタイ 10:34-37）

②「さて、イエスの十字架のそばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤとが、たたずんでいた。イエスは、その母と愛弟子とがそばに立っているのをごらんになって、母にいわれた、『婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です』。それからこの弟子に言われた、『ごらんなさい。これはあなたの母です』。そのとき以来、この弟子はイエスの母を自分の家に引きとった。」（ヨハネ 19:25-27）

③「ごらんなさい、ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、また姉妹、また母なのである。」（マルコ 3:34-35）

8. 「最終的に最後のアフォリズムにおいて、イエスの家族に対する攻撃の論点はきわめて明瞭になっている。5人のメンバーからなる標準的な地中海的家族、つまり母と父、妻をもった既婚の息子と未婚の娘という拡大核家族全員が一つ屋根の下で生活していることを想像いただきたい。イエスは、自分はこの家族を引き裂くと述べているのである。……この攻撃は信仰に関わっているのではなく、権力に関わっている。攻撃は父母を息子、娘、嫁の上に置く地中海的家族の権力軸に加えられている

のである。」(Crossan,1994, pp.59-60)

9. テキスト①とテキスト②・③との間に見られる「家族」の意味転換プロセス＝「家族のメタファー化」、「批判(否定)→転換→拡張(肯定)」という意味転換プロセス。家族についての新しい理解の生成、「血の絆」という自然的関係性から「神のみこころ」という精神的関係性への意味のメタフォリカルな移行

↓

「神の国」とは「神の家族」である。

10. イエスの家族批判と家族の意味転換

個人の抑圧装置としての「家」(古代地中海的大家族の現実)

血縁関係への過度の信頼がもたらしたもの

血縁関係の昇華(精神化・霊化)＝意味の転換(解体と再統合)

血縁的集団から、精神的絆へ

共通の価値(キリスト教では「神の戒め」)への

コミットメント(信仰)による家族の再生

11. 家族のメタファー化の意義

生物学的血縁的家族の限界を超える可能性

↓

現実の家族を相対化し、そして再生する。

・血縁関係のない家族？

・超高齢化社会における人間的絆

12. 家族と公共性：家族は身内びいき(家族エゴイズム)を越えられるか

共通の価値の広がり、下からの共通価値の構築

<参考文献>

1. H・C・キー『初期キリスト教の社会学』ヨルダン社。
2. G・タイセン『新約聖書——歴史・文学・宗教』教文館。
3. Richard A. Horsley, *Sociology and the Jesus Movement*, Continuum, 1989.
4. 大貫隆『福音書研究と文学社会学』岩波書店。
5. 土戸清『ヨハネ福音書研究』創文社。
『初期キリスト教とユダヤ教——ヨハネ福音書研究の諸問題』教文館。
6. ジョン・ドミニク・クロッサン『イエス——あるユダヤ人貧農の革命的生涯』
新教出版社。
7. 芦名定道・小原克博『キリスト教と現代——終末思想の歴史的展開』世界思想社。
8. 小坂井敏晶『民族という虚構』東京大学出版会。
9. リクール『生きた隠喩』岩波書店。